

日本刀（大鳥圭介）

鍛冶研磨幾百回 霜鋒三尺玉無埃  
不疑日本刀犀利 曾試盤根錯節來

解説 日本刀の美しさと、武器としての堅牢さとをたたえた詩。

鍛冶 研磨す 幾百回

霜鋒 三尺 玉に 埃無し

疑わず 日本刀の 犀利なるを

曾て 盤根 錯節を 試み 来る

語釈 ※鍛冶Ⅱ金属をきたえること。※霜鋒Ⅱ磨き澄まされて、霜のように光る切っ先。※三尺Ⅱ剣をいう。刀剣の刃の長さは、通常三尺を規準とすることから、このようにいう。※玉Ⅱ刀の美しさを玉にたとえる。※犀利Ⅱ堅く鋭いこと。※盤根錯節Ⅱ盤根はわだかまった木の根。錯節は入りくんだ木のふし。物事の処置に困る程、複雑であることのたとえ。

通釈 鍛えぬき、磨きぬくこと幾百回であろうか。霜の如く光る切っ先をもつ、この日本刀に、埃、一つついてはいない。日本刀が犀利であることは、少しも疑いのないことだ。何故といえ、あの諸派入り乱れて、複雑怪奇な様相を呈していた幕末が、維新の動乱の時代を、まさにこの日本刀で切り開いたことを試みた結果が明らかなのだから。